

社会現象としての汚職

－全体論的視点からタイの事例を中心として

学位論文内容の要旨

本研究ではまず、政治学や経済学における汚職の先行研究についての検討が行われる。最も多くの汚職研究が行われてきたこれらの分野では、スコット、ハンチントン、ナイをはじめとする政治学者および経済学者の研究が代表的なものとして紹介される。これらの研究は、主要な研究対象を官僚システムや統治形態においてきたことによって、汚職を生み出す構造的問題や機能的側面にのみ注目してきた。このため、政治家や上級官僚による大きな政治的汚職（Grand corruption）についての研究はおこなわれても、社会全体で広範に行われている一般の役人による小さな汚職（Petty corruption）については、ほとんど研究されることがなかった。さらに、民衆レベルの汚職について考慮される場合でも、汚職を「後進性」や「他者性」と結びつける傾向があり、実際の汚職現象についての十分な理解を得ることが出来なかった。

しかし、近年になって、汚職現象と文化的な側面との関係性が際立って認識されるようになり、パルダムなどにより宗教と汚職との顕著な関連性が明らかにされてきた。しかし、これらの研究も、宗教をはじめとする文化的要素が汚職に与える影響や関連性を述べるのみで、さまざまな社会の文化が、「なぜ」、「どのように」特定の汚職現象を引き起こすのかを明らかにするものではなかった。これらの理論的・方法的問題点を解決するため、グプタをはじめとする人類学における汚職の先行研究の検討がなされる。ここで理論的特徴や課題について考察された、人類学における汚職研究は、汚職現象における相互作用に着目したネットワーク理論や、モース、マリノフスキー、サーリンズなどの贈与論や互酬性論などを基にしたもので、汚職研究における大きな可能性を持っていることが示される。

また、方法的には人類学のフィールドワークで行われる、「観察」と「インタビュー」によって具体的な調査がおこなわれる。汚職現象は必ずしも研究者が対象にする個別の場所や空間にあるとは限らず、大衆の日常的サイクルの総体にあるとも考えられる。したがって、汚職それ自体は直接に観察可能ではなくても、インフォーマルな会話、および、人々の日常における談話を通して、人々がそれをどう認識するかに焦点をあわせ、分析することが可能である。「観察」によって、インフォーマントにおける、フォーマルとインフォーマルな規範の間で、どのような実践が重要だとみなされているかを理解する事が可能となる。本研究では、バンコクを中心とした長期のフィールドワークを行い、「観察」と「インタビュー」によって、仮説生成的な汚職現象についての解釈と分析がおこなわれたが、これが本研究における基本的な調査方法である。

つぎに汚職現象における相互作用を実際の社会的文脈で理解するため、タイにおける汚職事例の検討が行われる。そこでは、1932年の革命前後のタイ社会における汚職現象の顕在化、人々の汚職への認識の変容、日常的慣行と汚職の関係など、現代のタイ社会にいたる、汚職現象の全体的な概観がなされたのち、汚職現象に直接関わり影響力を有する、タイ国家公務員と官僚制度について考察される。そこでは、タイ官僚制の歴史的沿革、国家公務員の持つイデオロギー構造、その一般国民への影響とともに、公務員の地位や役割について人々が抱く社会的認識について考察される。つぎに、タイ社会における汚職行為が、なぜ広く社会的に受容されているかを理解するため、公務員側のインタビュー調査結果が示される。対象とした30名の公務員の汚職行為についてのナラティブから、「受け取る側」の公務員の汚職にたいする理解が4つに分類される。さらに、汚職現象において重要な役割を果たしている、「与える側」である市民についての調査結果が示され、50名のインタビュー結果にもとづいて、バンコク市民が汚職をどのように認識し行動しているのかが、個々のナラティブとして示される。

これらのバンコクを中心とした調査の結果、現在でもほとんどのタイ人のなかに仏教的信仰が深く根付いており、汚職についての多くのナラティブの中において、さまざまな仏教的解釈がおこなわれている事が明らかにされる。そのひとつは、輪廻転生という信念に基づいて「個人の業の結果は、その本人に戻ってくる」と考えることによって、現実の汚職を正当化する自己中心的な解釈である。また、近代化が進み消費経済が浸透してきたタイの都市部では、自己の幸福へと導く仏教的信念である「良い行為」あるいは「功德」に対する理解が、かつての抽象的な理念から、消費社会における金銭などの具体的な形態を持つように変容することで、社会悪としての汚職行為と宗教的善行という矛盾した行為が、アナログカルに理解されている事などが示される。また、フェスティンガーによれば、一般市民にとって汚職は「認知的不協和」を起こす行為だが、仏教はその反感を抑えてくれる「認知要素」としても機能すると考えられる。このように、現在のタイ人の仏教解釈が、汚職を宿命論的に受容し、維持再生産する上で大きな役割を果たしていることが、「観察」と「インタビュー」によって、仮説生成的ではあるが明らかにされた。

これまで述べた本論文の汚職に関する理論的・実証的研究は、従来の汚職研究が、政治・経済的研究が国家や官僚組織に重点をおいた一面的な議論であることが明らかにした。また、人類学的な「観察」と「インタビュー」は、汚職現象についての個々のナラティブの解釈と分析をとおして汚職現象を捉えるものであり、従来の研究においては困難だった、社会全体で広範に行われている一般の役人による小さな汚職 (Petty corruption) の研究において、大きな寄与をすることが示された。また、社会全体において大きな影響を持つ宗教的信念や儀礼が、汚職の再生産や正当化において大きな役割を果たしていることが仮説的ではあるが明らかにされ、今後の汚職研究における文化的側面からのアプローチの重要性が示された。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 宮 武 公 夫
副 査 助教授 小 田 博 志
副 査 助教授 桜 井 義 秀

学 位 論 文 題 名

社会現象としての汚職

－全体論的視点からタイの事例を中心として

論文審査委員は、以下の経過及び内容で論文審査を行った

第1回審査	平成14年12月13日	論文を審査委員に配布、日程調整
第2回審査	平成15年1月31日	論文内容の審査、問題点の検討
第3回審査	平成15年2月10日	第1回口述試問
第4回審査	平成15年2月10日	口述試問の内容の検討、
第5回審査	平成15年4月28日	第2回口述試問
第6回審査	平成15年4月28日	試問結果及び審査内容の検討、学位授与の可否判定
第7回審査	平成15年4月30日	報告書の作成と点検

本論文は以下の8章から構成されており、各章の構成、内容、理論的妥当性について各審査委員による詳細な検討、審査が行われた。

第1章では、一般的な政治学・経済学における汚職研究で、汚職がどのように位置づけられているのかが論じられる。また、汚職の定義、その形態や分類について考察が、先行研究や国際機関の資料をもとに行われる。また第2章では、汚職を「後進性」や西欧社会とは異質な「他者」の現象と捉えがちな、政治学・経済学における汚職研究とは異なって、地域のコンテキストをもとにしたフィールド調査による、人類学的汚職研究の特徴と課題点が検討される。そこでは、相互作用に着目したネットワーク理論や、贈与論・互酬制論をもとにした人類学的汚職研究の重要性が明らかにされる。これらの、人類学、社会学、経済学、政治学分野での先行研究の読解と批判的検討は妥当なもので、幅広い資料を用いた理論的解釈はすぐれたものとして評価される。

次に第3章以降では、タイの汚職事例に関する検討が行われる。第3章では、1932年の革命前後のタイ社会における汚職現象の顕在化、人々の汚職への認識の変容、日常的慣行と汚職の関係など、現代のタイ社会にいたる、汚職現象の全体的な概観がなされる。また第4章では、汚職現象に直接関わり、影響力を有するタイ国家公務員と官僚制度につ

いて考察される。そこでは、タイ官僚制の歴史的沿革、国家公務員の持つイデオロギー構造、その一般国民への影響とともに、公務員の地位や役割について人々が抱く社会的認識について考察される。さらに第5章では、タイ社会における汚職行為が、なぜ広く社会的に受容されているかを理解するため、公務員側のインタビュー調査結果が示される。対象とした30名の公務員の汚職行為についてのナラティブから、「受け取る側」の公務員の汚職にたいする理解が4つに分類される。さらに第6章では、汚職現象において重要な役割を果たしている、「与える側」である市民についての調査結果が示される。この章では、50名のインタビュー結果から、バンコク市民が汚職をどのように認識し行動しているのかが、個々のナラティブとして示される。第7章では、第3章から6章までの調査結果に基づいて、バンコク周辺の人々の汚職現象に対する価値体系や認識が考察される。その結果、日常的な宗教的実践や儀礼を介したタイ仏教の解釈が、汚職現象の受容と正当化に大きな役割を果たしている可能性が論じられ、仮説的ではあるが、近代化によって物質主義的要素が増大した現代のタイ的仏教観が、儀礼や、「輪廻転生」や「功德」の概念などとおして、汚職の正当化や再生産に大きな役割を果たしていることが明らかにされる。さらに第8章では、全体的な論文内容の総括と、今後の汚職研究への展望と可能性が述べられる。

これらの、タイにおける官僚制を中心とした歴史的考察と、バンコクを中心としたフィールド調査の結果、人々には仏教的信仰が深く根付いており、汚職においても、多くの仏教的な解釈がおこなわれている事が、実証的に解明された。このように、現在のタイ人の仏教解釈が、汚職の維持再生産において大きな役割を果たしていることが、具体的資料などによって明らかにされた点は、従来の制度や経済を中心とした汚職研究をさらに深化させるものとして評価できる。本論文は、タイのバンコック周辺における調査結果を基にしたもので、タイ社会全体における汚職研究へと敷衍するにはさらなる研究の進展が必要である。しかし、著者のこのような汚職に関する理論的・実証的研究は、従来の政治・経済的な汚職研究が、国家や官僚組織に重点をおいた一面的な議論であることを具体的な資料をもとに明らかにしている。また方法的には、官僚側と市民側の相互ネットワークとして汚職現象を捉えるもので、新たな仮説生成形の方法論的試みとして高く評価される。この研究は、著者自身の自国における汚職問題への強い問題意識から生まれたもので、汚職研究における新たな方法論的視点の導入は、単なる学術研究にとどまらず、応用人類学的な現実問題への寄与が期待されるものとして高く評価できる。

以上の審査結果から、本審査委員会は全員一致で本研究を博士（文学）に相応しいものと認定した。